

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

尾和潤美

【所属】(助成決定時)

名古屋短期大学

【研究題目】

オルタナティブな国際協力のガバナンス構築に向けて：アフリカの事例から

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、新興国をはじめとする新たなアクターによるアフリカへの台頭が、援助をする側と援助を受ける側との既存の関係性にどのような影響を与えているかを検証することである。近年の国際開発協力は、開発協力に携わるアクターの数が増えると共に、援助の手法や形態も多様で複雑化しており、新興国による国際開発援助に関する研究も増えている。伝統的ドナーとは異なる形態の援助を供与し、援助を通じて相互利益を重視する新興ドナーは、既存の開発援助の構造及び伝統的ドナーに対して挑戦的な存在として言及されることが多い。したがって、本研究では、アフリカにおける現地調査を通じて、既存の伝統的ドナーと被援助国との関係に与える影響の有無や、具体的にどのような変化が起こっているかについて明らかにすることを目的とする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、伝統的ドナー及び新興ドナーの援助の形態や動機の相違などこれまでの伝統的ドナーと途上国との関係性について既存研究を通して整理した上で、約3週間にわたって実施したアフリカのウガンダ及びエチオピアでの現地調査を通じて新興国がどのような国際協力や支援活動を行っているか、新興国の台頭により、伝統的な先進国、新興国及びアフリカの政府の3つのアクターの関係性が現地においてどのように変化しているかを調査した。

ウガンダ及びエチオピアを調査国として選んだ理由は、両国とも多くのドナー機関が存在しドナー間での援助協力が先進的に取り組まれている一方で、新興国の存在感も増しており、研究目的に沿った事例分析ができると考えたからである。また、ウガンダは国際機関をはじめとするドナー機関からドナー・ダーリン(優等国)として見なされていた一方で、エチオピアは他のアフリカ諸国と比較して強い権威主義的な政府が存在するとともに近年は海外からの民間投資が目覚ましいという相違点もある。さらに、ウガンダでは近年石油資源が発見され、エチオピアでは政府が力を入れて取り組んでいる工業団地の建設が拡大していることにより、援助よりも投資や経済成長に重点が置かれ、アフリカの政府・新興国・先進国ドナーの関係性に緊張感が生まれていることが予想される。

研究方法としては、各アクターの動機や行動要因に焦点を当て、国際開発協力におけるアクター間の関係性を体系的に分析した。ウガンダ(約10日間)及びエチオピア(約10日間)での現地調査において、具体的には、開発援助の受け入れ機関である財務省や道路公社を中心としたウガンダやエチオピア政府機関、国際機関や二国間ドナー機関、新興国、NGO、研究機関等の担当者に対してインタビューを実施した¹。約35件のインタビュー調査を行い、半構造化インタビュー方法を採用した。

¹ 在ウガンダ日本大使館の亀田大使及び高田氏、そして在エチオピア JICA 事務所の栗田氏にインタビュー先を紹介頂き、大変お世話になった旨、謝意と共に申し添える。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究を通じて、新興国によるアフリカへの台頭は民間レベル及び政府レベルで進んでおり、アフリカ諸国の政府にオルターナティブな選択肢を与え、伝統的ドナーとアフリカ諸国との既存の関係性に変化を与えていることが明らかになった。ウガンダやエチオピアにおいては中国、インド、トルコなどの新興国が民間投資や政府による支援事業を実施しており、例えばウガンダでは電力分野やインフラ分野において、エチオピアではインフラ分野や投資関連事業において新興国の台頭が顕著に見られる。伝統的ドナーが供与できない巨額の資金を速いスピードで提供することでアフリカの経済を底上げできる可能性があり、また、伝統的ドナー諸国が援助協調を通じて同調した援助を行うのに対し、新興国は民主化や人権に関与しないことが多いため、アフリカ諸国から対等なパートナーと評価されている面もある。一方で、新興国の支援に対してアフリカ諸国の債務持続可能性や環境社会ガイドラインの面での懸念、労働者や安い製品を持ち込むことで地元のビジネスを阻害しているという批判もある。したがって、伝統的ドナーと新興国が互いに競争する関係性の中で、アフリカの政府は自らの交渉力やポジションを高めようとしていると考察できる。